

## 大地の滴 使い方

作物を健全に育てるための栽培の例 ～追肥型～ 対象作物イチゴ、トマトなど

窒素は必要最小限で光合成産物を増やすことが原則です。 発育初期に即効性の窒素を極力用いないで初・中期は窒素、リン酸、カリをほぼ同量のバランスで与えます。（土壌分析と照らし合わせ増減する）根量が十分でない初期は週に2回くらいの割合で葉面散布300倍～800倍、株元灌注800倍～1000倍を組み合わせて施していきます。そうすることで窒素過多にならず、軟弱徒長を防ぎ、組織が密に引き締まった、充実した株に仕上がっていきます。 中期に入ったなら、灌注に週2～3回10a当たり、2～3ℓを施肥の前後に挟んでいきます。生育が進んで花芽分化の交代初期からリン酸を増やしていきますが、カルシウムは休まず継続して施用していきます。 着色・成熟期に入るとカリとカルシウムを効かせることが大変重要になってきます。カリが多めの施肥にきりかえていき、カルシウムも週3回程度茎にもかかるよう増やしていきます。 カルシウムを全ステージで不足なく与えることが最大のポイントになり、そうすることで窒素に対し光合成産物が（C/N比）が高くなり病害虫にも強く、糖度日持ちもよくなり、本当に品質の高いと言える作物が出来上がるのです。その他、農薬散布と組み合わせることで、減農薬が可能になります。慣行防除に組み合わせた場合、薬効が増しますので、（ウドンコ病に卓効）薬剤量をへらすことができます。

その場合、大地の滴300倍～500倍の濃度に薬剤を加えてください。

効果からみた倍率例 500倍～1000倍（生育促進） 200倍～300倍(徒長抑制、硝酸軽減)

300倍～500倍（薬効強化）※アルカリ性のものとは混ぜない

大地の滴 内容成分

有機酸Ca 15%（酢酸カルシウム＋発酵乳酸カルシウム）トレハロース、ラフィノース糖類18%

他黒酢アミノ酸、ミネラル、ビタミン、フルボ酸含む

20kg ポリエチレン容器液